中学生のいじめに否定的な仲間集団の規範について1)

大西彩子*•吉田俊和*

Peer-group Norms Regarding Abusive Behavior —Junior High School Students—

Ayako ONISHI* and Toshikazu YOSHIDA*

The purpose of this study was to examine the relationships between class enjoyment, exclusivity in peer-group, trust and peer-group norms regarding abusive behavior. Participants were 288 junior high school students (male 181, female 107) who responded to a questionnaire survey. The students completed a questionnaire that asked about class enjoyment, trust, peer-group norms regarding abusive behavior and exclusivity of the peer-group. A hypothesized model was investigated, using structural covariance analysis. The results indicated that: (1) exclusivity of the peer-group has a direct effect on norms for preventing abusive behavior, regardless of sex; (2) class enjoyment has a direct effect on norms for despising abusive behavior, regardless of sex; (3) anxiety for being betrayed has a direct effect on norms for preventing abusive behavior for males; (4) class enjoyment has a direct effect on norms for preventing abusive behavior for females. The importance of classroom management to keep classes enjoyable, and maintaining trust between classmates was discussed.

key words: abuse, peer-group norms, junior high school student

問題と目的

学校現場で発生するいじめは、被害生徒の適応を脅かす重大な問題である(坂西, 1995; Beane, 1998; Rigby, 1998; 佐藤, 1997; 立花, 1990)。近年の研究は、いじめを集団の病理と捉え、加害者と被害者だけでなくその周囲の生徒もいじめに重要な役割を果たすことを明らかにしてきた(Atlas & Pepler, 1998; Gini, 2006; 森田・清水、1986; 大西, 2007; Salmivalli, Lagerspetz, Bjorkqvist, Osterman, & Kaukiainen 1996)。

なお,いじめの発生件数は中学校で最も多いこと が文部科学省によって報告されている(文部科学 省、2007)。中学生という時期は、友人関係が個人の学校生活の適応感と大きく関連することから(大久保、2005)、いじめの加害者に最も影響を与える集団とは、その生徒が所属する仲間集団であると考えられる。大西・吉田(2007)は、間接的いじめに否定的な仲間の集団規範を低く意識している生徒ほど、間接的いじめの加害傾向が高いことを明らかにした。この結果は、いじめに許容的な集団規範を形成している仲間集団に所属する生徒は、そうでない生徒よりも、いじめを行う可能性が高いことを示唆している。

集団規範とは「集団成員の相互作用が進むとその 所産として形成されるもので、繰り返し生起する一

¹⁾ 謝辞

本論文の英文要約をご校閲いただきました名古屋大学の高井次郎先生に心から感謝申し上げます。

^{*} 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

範疇の事態において、集団の全メンバーに共通に妥当すると認知されている特定の行動型に同調するよう、集団メンバーに作用する社会的圧力の合成されたもの(佐々木、1963)」と定義される。集団規範の社会的圧力によって引き起こされる同調行動については、社会心理学の分野で様々な研究がなされてきた(Asch、1951;藤原、1976;永田、1980;卜部・佐々木、1999)。

いじめが顕著である中学校は青年前期にあたり、同世代に強い影響を受ける時期である(森田・滝・秦・星野・若井、1999; 落合・佐藤、1996)。したがって、仲間集団の集団規範がいじめを是とするものであれば、そこでいじめが生起したときに、仲間の社会的圧力に逆らって生徒がそれを制止することは難しい。また、生徒がいじめを是とする仲間集団の期待に応えるために積極的にいじめを行おうとすることも考えられる。すなわち、いじめの発生を防ぐためには、生徒の周囲に存在する集団規範がいじめに否定的なものである必要がある。しかし、いじめに否定的な仲間集団の規範(以下、いじめ否定仲間規範と略記)の形成を促進・抑制する要因について研究したものは、あまり見られない。

そこで、本研究では中学生のいじめ否定仲間規範について注目し、どのような要因がいじめ否定仲間 規範の高低を規定するのかを明らかにすることで、 いじめの予防に関する有効な知見を提供することを 目的とする。

なお、本研究では、いじめ否定仲間規範に関連する要因について検討する際に「仲間集団に所属する成員の対人的な信念から、形成された態度が、いじめ否定仲間規範に影響を及ぼす」と仮定し、対人的な信念として「信頼感・裏切られ不安」を、態度として「学級享受感」と「仲間集団排他性」を取り上げる。

学級享受感とは「生徒が学級生活を楽しんでいる傾向」と定義されるものである。仲間はずれにする,無視する,陰口を言うなどの間接的いじめを行う生徒は,学校での劣等感や弱小感,無力感などを回復することを目的としたいじめを行う傾向があるという(佐藤,1997)。さらに,学校への適応感が低く,学校に否定的な生徒ほど,暴力や逸脱行動に対する欲求が高く,規範意識が低いことも明らかにされており(小嶋・松田,1999),生徒の学級生活上の不

満が、いじめを容認する規範を作り出すことが予測される。

仲間集団の排他性とは「自分の仲間であるかどう かによって相手に対する態度を変えたり、 自分の仲 間と活動することに比べ, 仲間以外の児童と活動す ることを楽しくないと感じたりする傾向しをいう (三島, 2003)。排他性には集団間の結束を高めると いう肯定的な側面もあるが、集団外の成員との交流 が阻害されるという負の側面もある。すなわち、排 他性の高い仲間集団に所属している生徒は、日常的 に仲間以外の生徒と関わる機会が乏しいため, 現在 の仲間集団と縁を切って他の集団に入ることが難し い状況にある。このように、他に行き場がなく、現 在の仲間集団と共に学級生活を送らないと孤立して しまう環境では、仲間集団の意向に背くコストが高 くなり、仲間集団内で発生したいじめを制止するこ とが難しくなると考えられる。また、Grotpeter & Crick (1996) は、仲間集団内で無視や仲間はずれを 行う児童と排他性との関連について検討し、友人関 係を攻撃手段に利用する児童は排他性が高いことを 示している。さらに、三島 (2003) は、親しい友人を いじめた経験のある児童と排他性との関連について 検討し, 児童の排他性が男女にかかわらず親しい友 人をいじめた体験と関連すること示している。すな わち, 排他性の高い集団では,いじめ否定仲間規範 は低くなることが予測される。

天貝 (1995) は高校 1 年生を対象に信頼感尺度を 作成し「不信」,「自分への信頼」,「他人への信頼」 の3因子を抽出している。本研究で取り上げる信頼 感は「他人への信頼」に、 裏切られ不安は「不信」 に基づいており、特定の他者および、人一般を対象 としている。ただし、「他人への信頼」という因子名 は、「自分への信頼」 を取り上げない本研究におい て,自他の区別が必要ではないため「信頼感」とし, 「不信」という因子名は信頼感が1因子構造であり、 それが低い状態であるという誤解を招く可能性があ るため、「裏切られ不安」という表現を用いた。信頼 感は、精神的健康にポジティブな影響を及ぼすこと が注目されており、例えば、親友との信頼関係が高 い生徒は、低い生徒と比較して学校適応の指標の一 つであるリラックスした気分が高いことが示されて いる(酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村, 2002)。 また、教師への信頼感が高い生徒は、学校でのネガ

ティブな感情が低減され、学校適応に正の影響を及ぼすということが明らかになっている (Lee, 2007)。 すなわち、信頼感が高い生徒は低い生徒と比較して、より学級享受感が高いことが予測される。

裏切られ不安と排他性との関連は、信頼の「解き 放ち | 理論(山岸, 1998)によって説明される。こ の理論によると、人は信頼が高いと関係を強化する と同時に拡張しようとする反面, 信頼が低いときに は対人関係を固定化することで社会的不確実性を低 減しようとする。すなわち、仲間集団の排他性を高 め,他の成員を寄せ付けないほうが,所属成員につ いて多量の情報を蓄積することが可能になり、裏切 りについての予防的処置が行いやすくなるのであ る。ゆえに、裏切られ不安が高い生徒は、安心して 学校生活を送れる環境を作るために, 仲間集団の排 他性を高めようとすることが予測される。相馬・浦 (2007) は、大学生を対象に一般的信頼感が低い者が 高い者よりも排他的な行動を取りやすいことを明ら かにしている。しかし,これまでに中学生を対象に 信頼感と仲間集団の排他性との関連を検討した研究 は見られない。

上述したことから、本研究では以下の仮説が予測され、Figure 1 のような要因モデルをいじめが顕著に見られる中学生を対象に検討する。なお、中学生の友人関係は、男女で質的に異なることがさまざまな研究で明らかにされているため(榎本、1999、小保方・無籐、2005、柴橋、2001)、モデルの検討は男女別に行うことにする。

- (1) 信頼感は、学級享受感に正の影響を与える。
- (2) 裏切られ不安は、仲間集団排他性に正の影響を与える。
- (3) 学級享受感は、いじめ否定仲間規範に正の影響を与える。
- (4) 仲間集団排他性は、いじめ否定仲間規範に負の 影響を与える。

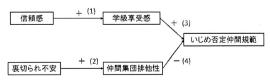


Figure 1 いじめに否定的な仲間集団の規範に影響を及ぼす要因モデル

方 法

調査対象 京都府内の私立中学校 12 クラス, 361 名を調査対象とした。調査時期は 2005 年 10 月であった。調査は担任によって集団で実施され、回答はすべて匿名で行われた。なお、本研究は仲間集団の規範について検討するものであるため、自分の所属する仲良しグループの友人数を尋ねる質問項目を加え、3 人以上 10 人未満の仲間が存在すると答えた生徒のみを分析対象者として選出した。不完全回答者を除外し、288 名 (男子 181 名, 女子 107 名)を分析対象者とした。

尺度 本研究で使用された尺度は以下のものである。

いじめに否定的な仲間集団の規範の測定:大西(2007)を参考に、具体的ないじめ行動を行うことと、所属する仲間集団の友人がいじめを行ったときにそれを制止することに対する仲間集団の評価について10項目で質問した(Table 1参照)。作成した10項目の妥当性については、心理学を専攻する大学院生12名の確認を受けた。そこで問題が指摘された項目は修正を行った。評定は「とてもいいと思うだろう」から「すごくまずいと思うだろう」の7件法で求めた。

学級享受感尺度: 古市(1994)が作成した学校享受感尺度の場面を学級に置き換え、中学校の教師3名と相談し、質問が具体性に欠け、意味内容が他と重複していると判断された1項目「このクラスでは楽しいことがたくさんある」を除去した9項目(Table 2参照)。5件法で尋ねた。

信頼感・裏切られ不安尺度: 天貝 (1995) の他人への信頼尺度と不信尺度を参考に、中学生の信頼感と裏切られ不安に関する項目を作成した。また、作成した12項目の妥当性については、心理学を専攻する大学院生12名の確認を受けた。そこで問題が指摘された項目は修正を行った。評定は5件法で尋ねた(Table 3参照)。

仲間集団排他性尺度: 三島 (2003) が作成した排他性尺度を参考に、仲間集団と仲間集団に所属する本人の排他性に関する11項目を作成し、心理学を専攻する大学院生12名および中学校教師2名の確認を受けた(Table4参照)。問題が指摘された項目は修正を行った。評定は5件法で尋ねた。

結 果

いじめに否定的な仲間集団の規範

10項目の評定値について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った (Table 1)。固有値の減退状況 (4.58, 1.56, .93, .72…) と因子の解釈可能性に基づき、2因子解を採用した。第1因子は「気に入らない人の悪口をわざと本人に聞こえるように言うこと」といったいじめ加害行動に対する仲間の評価を尋ねる項目の負荷量が高いことから、「いじめ否定仲間規範」と命名した。第2因子は、「誰かの持ち物を隠している人に、やめるように注意をすること」といったいじめ加害を阻止する行動に対する仲間の評価を尋ねる項目の負荷量が高いこ

とから、「いじめ制止仲間規範」と命名した。次に内的整合性を検討するために α 係数を算出した。その結果、「いじめ否定仲間規範」では α =.86、「いじめ制止仲間規範」では α =.88 という値が得られ、十分な内的一貫性が示された。抽出された各項目の合計得点を、それぞれ、いじめ否定仲間規範得点、いじめ制止仲間規範得点とした。

学級享受感尺度

9項目の評定値について主因子法による因子分析を行った (Table 2)。固有値の減退状況 (5.31, .99, .57…) と因子の解釈可能性に基づき,古市 (1994)の学校享受感尺度と同様,1因子解を採用した。内的整合性を検討するために α 係数を算出した。その結果, α =.90 という値が得られ,十分な内的一貫性

Table 1 いじめに否定的な仲間集団の規範の因子分析(主因子法・プロマックス回転)

F_1	F_2	共通性	
.87	05	.71	
.85	10	.64	
.79	.01	.64	
.75	.05	.61	
.59	.01	.35	
.03	.80	.68	
.09	.78	.69	
00	.67	.45	
.06	.59	.40	
17	.42	.12	
41.7	52.7		
	.85		
	.87 .85 .79 .75 .59	.87 .85 .79 .01 .75 .05 .59 .01 .03 .09 .7800 .06 .59 .17 .42 .41.7 .52.7	

Table 2 学級享受感尺度の因子分析(主因子法)

項 目	
〈学級享受感 α=.90〉	
私は,このクラスが好きだ	.85
このクラスは楽しくて,一日があっという間にすぎてしまう	.84
私は毎朝,クラスへ行くのが楽しみだ	.84
このクラスは楽しいので,少しくらい体の調子が悪くても学校に行きたい	.79
日曜日の夜、また明日からこのクラスかと思うと気が重くなる*	.70
このクラスにいるのが嫌なので,授業が終わったらすぐに家に帰りたい*	.67
今のクラスは楽しいので、いつまでもこのクラスにいられたらよいのにと思う	.66
このクラスがなければ、毎日はつまらないと思う	.63
このクラスでは,嫌なことばかりある*	.61
累積寄与率(%)	54.3

が示された。そこで、抽出された各項目の合計得点 を学級享受感得点とした。

信頼感・裏切られ不安尺度

12項目の評定値について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った (Table 3)。固有値の減退状況 (4.32, 1.58, .91, .77…) と因子の解釈可能性に基づき、2因子解を採用した。第1因子は「人間は信頼できるものだと思う」といった人への信頼に関する項目の負荷量が高いことから、「信頼感」と命名した。第2因子は、「私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう」といった人に裏切られることを恐れる項目の負荷量が高いことから、「裏切られ不安」と命名した。次に内的整合性を検討する

ために α 係数を算出した。その結果,「信頼感」では α =.86,「裏切られ不安」では α =.82 という値が得られ,十分な内的一貫性が示された。抽出された各項目の合計得点を,それぞれ,信頼感得点,裏切られ不安得点とした。

仲間集団排他性尺度

11 項目の評定値について主因子法による因子分析を行った。固有値の減退状況 $(3.52, 1.20, .94\cdots)$ と因子の解釈可能性に基づき,三島 (2003) と同様に1因子解を採用した。因子負荷量が .40 未満の 3項目を除外し,再び因子分析を行った $(Table\ 4)$ 。内的整合性を検討するために α 係数を算出した。その結果、 $\alpha=.80$ という値が得られ,十分な内的一貫性

Table 3 信頼感・裏切られ不安尺度の因子分析(主因子法・プロマックス回転)

項目	F_1	F_2	共通性
〈信頼感 α =.86〉			
人間は信頼できるものだと思う	.77	01	.60
これまでに出会ったほとんどの人は私によくしてくれた	.67	.01	.44
私はクラスに信頼できる友達がいる	.66	.05	.40
まわりのほとんどの人は私を信頼してくれている	.63	01	.41
たいていの人はお互いに正直で、誠実でいたいと思っている	.59	.12	.28
普通にしていれば、この先の人生でも信頼できる人に出会えるように思う	.54	12	.38
私は多少のことがあっても友達との信頼関係をたもてる	.46	23	.38
〈裏切られ不安 α=.82〉			
私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう	.10	.72	.45
今は心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う	05	.61	.41
過去に、だれかに裏切られたりだまされたりしたので、人を信じるのが怖くなっている	.03	.61	.35
気をつけていないと,人は私の弱みにつけ込もうとするだろう	03	.58	.36
人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう	01	.51	.27
累積寄与率(%)	31.1	39.2	
因子間相関		56	

Table 4 仲間集団排他性尺度の因子分析(主因子法)

項 目	
〈仲間集団排他性: α =.80〉	
私は友だちと遊んでいるとき,自分の友だちではない子も一緒に遊んでいると楽しくない	.68
仲良しグループの人たちは,友だちと遊んでいるとき,友だちではない子も一緒に遊んでいると楽しくないと思う	.59
自分のいちばん大切な友だちが,ほかの子と楽しそうに話をしているのを見ると,なんだか嫌な気分になる	.57
仲良しグループの人たちは,あまり他のグループの子とは話さない	.56
私は自分のいちばん大切な友だちを,他の子にとられそうで心配になる	.55
今の仲良しグループが好きなので,新たなメンバーは入らないほうがいい	.54
仲良しグループの人たちは,気持ちの中で友だちと友だちではない子をはっきりと分けていると思う	.53
自分は,あまり他のグループの子とは話さない	.53
私は自分の気持ちの中で,自分の友だちと友だちではない子をはっきりと分けている	.50

N=231	いじめ制止仲間規範	仲間集団排他性	信頼感	裏切られ不安	学級享受感
いじめ否定仲間規範 いじめ制止仲間規範 仲間集団排他性 信頼感 裏切られ不安	.48***	15* 34***	.23*** .23*** 18**	20** 35*** .45*** 45***	.21 ** .29*** 31*** .60*** 49***

Table 5 調査に用いた各尺度間の2変量相関(男子)

***p < .001, **p < .01, *p < .05

Table 6 調査に用いた各尺度間の2変量相関(女子)

N = 122	いじめ制止仲間規範	仲間集団排他性	信頼感	裏切られ不安	学級享受感
いじめ否定仲間規範 いじめ制止仲間規範 仲間集団排他性 信頼感 裏切られ不安	.47***	19* 31***	.36*** .33*** 29**	20* 26*** .38*** 47***	.50*** .44*** 35*** .54*** 32***

***p < .001, **p < .01, *p < .05

が示された。そこで、抽出された各項目の合計得点 を、仲間集団排他性得点とした。

調査に用いた各尺度間の2変量相関

因子分析の結果得られたいじめ否定仲間規範,いじめ制止仲間規範,信頼感,裏切られ不安,学級享受感,仲間集団排他性の各変数間の相関係数を男女別に算出した(Table 5,6)。男女共に,信頼感と学級享受感で中程度の相関が認められた。また,裏切られ不安と仲間集団排他性との間に,女子ではやや低い正の相関が認められた。学級享受感といじめ否定仲間規範との間には,男子では低い正の相関が,女子では中程度の正の相関が認められた。仲間集団排他性といじめ制止仲間規範では,男女共にやや低い負の相関が示された。いじめ否定仲間規範といじめ制止仲間規範では,男女共に中程度の正の相関が認められた。いじめ否定仲間規範といじめ制止仲間規範

いじめに否定的な仲間集団の規範に影響を及ぼす要 因の検討

信頼感,裏切られ不安,仲間集団排他性,学級享受感が,いじめ否定仲間規範といじめ制止仲間規範に与える影響過程モデルを,Table 5,6 の相関と問題部分の仮説を考慮した因果モデルを構成し,最尤推定法による構造方程式モデリングによって検討した。モデルの解釈可能性と適合度検定の結果を検討し,男子は,Figure 2 ($\chi^2(6)$ =7.491,p<.28, GFI=

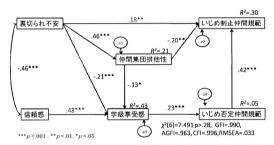


Figure 2 いじめに否定的な仲間集団の規範に影響を及ぼす要因の因果モデル(男子)

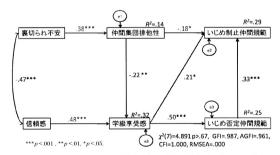


Figure 3 いじめに否定的な仲間集団の規範に影響を及ぼす要因の因果モデル(女子)

.990, AGFI=.963, CFI=.996, RMSEA=.033),女子は,Figure 3 ($\chi^2(7)$ =4.891, p<.67, GFI=.987, AGFI=.961, CFI=1.000, RMSEA=.000) のモデルを採用した。標準化された因果係数,決定係数をFigure 2.3 に示す。

採用されたモデルでは、信頼感から学級享受感へ

のパスは有意であり、正の影響が認められた(男子 .48,p<.001,女子 .48,p<.001)。すなわち、仮説 1 は支持された。なお、裏切られ不安から仲間集団排他性へのパスも有意であり、正の影響が認められた(男子 .46,p<.001,女子 .38,p<.001)。ゆえに仮説 2 は支持された。さらに、学級享受感から、いじめ否定仲間規範へのパス係数も有意であり正の影響が認められた(男子 .23,p<.001,女子 .50,p<.001)。仮説 3 は支持された。最後に、仲間集団排他性からいじめ制止仲間規範へのパス係数も有意であり、負の影響が認められた(男子 -.20, p<.01,女子 -.18, p<.05)。仮説 4 は支持された。

考 察

本研究の目的は、信頼感と裏切られ不安が仲間集団排他性と学級享受感を媒介し、いじめ否定仲間規範およびいじめ制止仲間規範に与える影響について検討することであった。

モデルを検討した結果、男女共に信頼感は学級享受感に正の影響を与えることで間接的に、いじめ否定仲間規範に影響を与えていた。信頼感が高い生徒ほど学級生活を楽しんでいることが示された本研究の結果は、友人関係の満足感が学級生活への適応に大きく関与するという大久保(2005)の研究と一致するものである。信頼感が高い者は、信頼感が低い者と比較して対人問題を抱えることが少ないといわれている(Gurtman, 1992)。安心して互いに個性を認め合うことができる信頼感の高い生徒が所属する仲間集団では、対人問題が生起しにくく、たとえ問題が生じたとしても、成員間の話し合いなど平和的に問題が解決されやすいことが、学級生活が楽しいと感じられる一因であると考えられる。

裏切られ不安は、男女共に仲間集団排他性に正の影響を与えることで間接的に、いじめ制止仲間規範に影響を与えていた。すなわち、人に裏切られることを恐れる生徒ほど、仲間以外の人間を排斥する傾向があることが示された。現代のいじめは、身体的な弱者よりもむしろ種々の同調行動からの逸脱者が、いじめの標的にされる傾向がある(竹村・高木、1988)。この背景には、自分とは異なる行動や価値観を示す他者への不信感が存在すると考えられる。本研究の結果は、他者を信頼できない生徒は、自らが安心して生活するために、対人的情報をより確実

に把握できる排他性が高い仲間集団に所属し、たとえぞれが反社会的な行動であろうと仲間の意向には背かないように学校生活を送る傾向があることを示唆している。また、いじめに同調的な態度をとる生徒の友人関係は、競争的・非共感的であるということ(杉田・若松・杉山・菊池・片岡・菊地・寺田、1989)を踏まえると、彼らの不安とは、いつ自分が仲間からの攻撃対象になるかわからないという不安でもあると考えられる。こういった不安を解消するために、仲間集団内の社会的立場の弱い成員をスケープゴートに、いじめが発生する可能性もある。したがって、教師やスクールカウンセラーは、生徒が適切に日常的な対人不安を解消できるように、心理的な関わりを持つことが重要であるといえる。

学級享受感は男女共に、いじめ否定仲間規範に正の影響を与えており、学級生活を楽しんでいる生徒が所属する仲間集団ほど、いじめに否定的な規範を持つ傾向が見られた。岡安・高山(2000)は、無視や悪口によるいじめの加害経験を持つ生徒は、加害経験を持たない生徒と比較して学校ストレスが高いことを示している。また、仲間集団内のいじめは、生徒が持つ漠然とした不満の原因が、特定の友人に帰属されることで生起するといわれている(三島、1997)。本研究の結果はこれらを支持するものであり、個々の生徒が学級生活を楽しめるように配慮した学級運営を行うことで、いじめに否定的な仲間集団の規範構築が促進されることが示された。

仲間集団排他性は男女共に,いじめ制止仲間規範 に負の影響を及ぼしていた。この結果は、排他性の 高い集団にいじめが多いことを示した Grotpeter & Crick (1996) や三島 (2003) の先行研究と一致する ものである。仲間集団排他性が高いと、いじめ制止 仲間規範が低くなる原因として, 問題と目的で述べ た孤立のリスクが高まることのほかに、集団規範の コントロールが容易になることが考えられる。集団 規範とは成員の相互作用によって意識され、構築さ れるものである。すなわち、仲間集団外の生徒と接 する機会が少なく,仲間集団の規範のみを意識する 生活環境では,仲間集団の都合に合わせて規範が柔 軟に変化し,仲間の多数派の利益と合致すれば反社 会的行動でさえも支持する集団規範が比較的容易に 構成される恐れがある。いじめは社会的強者から社 会的弱者に対して行われるため、このような集団で

仲間のいじめを制止することは、他の成員から集団の利益を阻害する行為と捉えられる可能性がある。したがって、教師によってメンバーを振り分けたグループで協同作業を行うなど、生徒が仲間集団以外の生徒と交流する機会を定期的に与え、仲間集団の排他性を低くすることが、仲間の行ういじめを制止することが否とされる規範の構築を抑制する上で有効であると考えられる。

なお、男女共にいじめ否定仲間規範がいじめ制止仲間規範に最も強い正の影響を与えており、いじめに否定的な規範を持つ仲間集団に所属している生徒は、いじめを制止することに対する仲間規範も高いことが示された。近年、いじめ防止法の一つに、ピアサポートの利用が注目されているが(Boulton、2005; Cowie & Olafsson、2000; 伊藤、2007)、本研究の結果から、教師によってトレーニングされた生徒によるいじめへの介入や、生徒の相互監視によるいじめの早期治療を効果的に行うためには、いじめに否定的な集団規範が周囲に形成されている必要があることが明らかになった。

本研究は男女別にモデルの検討を行った。その結 果, 男女でほぼ同様のメカニズムが示されたが, 一 部,若干の違いが見られた。ここで示された相違は, 男子は、友人との同一行動を重視した関係を築こう とするが、女子は親密性を高めることを目的に互い の類似性を重視する(榎本, 1999)という友人関係 の質の違いが関連していると考えられる。まず、モ デルでは女子においてのみ, 学級享受感からいじめ 制止仲間規範に正の影響が示された。本研究で測定 したいじめ制止仲間規範とは, 所属する仲間集団で いじめが行われたときに、それを制止することに対 する仲間からの評価について測定している。すなわ ち,いじめを制止することは仲間との意見の違いを 示す行為となる。友人との関係が良好である学級適 応の高い生徒と比較して, 友人との関係が不安定な 学級適応の低い生徒は(大久保, 2005), いじめを 制止することで仲間集団から敬遠され、学級での居 心地がさらに悪化することを恐れるゆえに、仲間集 団のいじめを制止することを否定的に捉える傾向が あるのではないだろうか。また, 裏切られ不安から, いじめ制止仲間規範への直接効果が男子においての み示された。これは、男子の友人関係では同一行動 が重視されるため、裏切られ不安の強い生徒が所属

する仲間集団では、いじめを制止し、仲間がいじめ を行うときに同じ行動を取らないことが裏切り行為 と認識され否定的に評価されるためであると考えら れる。

最後に、本研究の反省点と今後の展望について述 べる。まず、本研究では物理的な制約から仲間集団 を特定して規範を測定せずに、生徒に自身の所属す る仲間集団の規範について尋ねるという間接的な方 法を取ったため、個々の生徒の認知的偏りを考慮で きていない。実際の仲間集団の規範とはずれがある 可能性を念頭において本研究の結果を解釈する必要 がある。また、本研究では、信頼感、裏切られ不安、 仲間集団排他性、学級享受感が、いじめ否定仲間規 範およびいじめ制止仲間規範に与える影響について 検討したが、いじめ否定仲間規範といじめ制止仲間 規範の決定係数からも明らかなように、本研究で着 目した要因以外にも, 社会的スキル, 自己抑制, 問 題解決能力、教師の指導態度など、いじめに否定的 な仲間集団の規範に影響を与える要因は数多く想定 される。本研究で取り上げなかった要因を含めて, いじめに否定的な仲間集団の規範との関連を検討す ることが、より効果的ないじめ防止対策を考える上 で重要である。

引用文献

天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響,教育心理学研究,43,364-371.

Asch, S. E. 1951 Effect of group pressure upon the modification and distortion of judgements. In H. Guetzkow (Ed.), *Group, leadership and man.* pp. 177–190. Pittsburgh: Carnegiee Press.

Atlas, R. S. & Pepler, D. J. 1998 Observations of bullying in the classroom. *Journal of Educational Research*, **92**, 86–99.

坂西友秀 1995 いじめが被害者に及ぼす長期的な影響 および被害者の自己認知と他の被害者認知の差, 社会心理学研究, 11, 105-115.

Beane, A. 1998 The trauma of peer victimization. In T. W. Miller (Ed.), *Children of trauma*. Madison, CT: International University Press.

Boulton, J. M. 2005. School peer counseling for bullying service as a source of social support: a study with secondary school pupils. *British Journal of Guidance & Counselling*, 33(4), 485–494.

Cowie, H. & Olafsson, R. 2000 The role of peer sup-

- port in helping the victims of bullying in a school with high levels of aggression. *School Psychology International*, **21**, 79–95.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に 対する感情の発達的変化,教育心理学研究,47, 180-190.
- Gini, G. 2006 Bullying as a social process: The role of group membership in students' perception of inter-group aggression at school. *Journal of School Psychology*, 44, 51–65.
- Grotpeter, J. K. & Crick, N. R. 1996 Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, **67**, 2328–2338.
- Gurtman, M. B. 1992 Trust, distrust, and interpersonal problems: a circumplex analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 989–1002.
- 藤原正光 1976 同調性の発達的変化に関する実験的研究―同調性におよばす仲間・教師・母親からの集団圧力の効果―, 心理学研究, 47(4), 193-201.
- 古市裕一 1994 学校生活の楽しさとその規定要因, 日本教育心理学会第 36 回総会発表論文集, 169.
- 伊藤亜矢子 2007 いじめの予防: いじめを生む学級風 土とピア・サポート (特集 いじめと学校臨床), 臨床心理学, 7(4), 483-487.
- 小嶋佳子・松田文子 1999 中学生の暴力に対する欲求・規範意識,加害・被害経験,及び学校適応感, 広島大学教育学部紀要(心理学),48,131-139.
- 小保方晶子・無籐隆 2005 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因,発達心理学研究, 16(3), 286-299.
- Lee, S. J. 2007 The relations between the student–teacher trust relationship and school success in the case of Korean middle schools. *Educational Study*, **33**(2), 209–216.
- 三島浩路 1997 対人関係能力の低下といじめ、名古屋大学教育学部紀要(心理学),44,3-9.
- 三島浩路 2003 親しい友人間にみられる小学生の「い じめ」に関する研究, 社会心理学研究, 19,41-50.
- 文部科学省 2007 児童生徒の問題行動等生徒指導上の 諸問題に関する調査, 文部科学省, 2007年11月 15日 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07110710/001/002.pdf (2008年3 月 22日)
- 森田洋司・清水賢二 1986 いじめ 教室の病, 金子書 房.
- 森田洋司・滝 充・秦 政春・星野周弘・若井彌一 1999 日本のいじめ 予防・対応に生かすデータ 集,金子書房.

- 永田良昭 1980 集団規範への同調および逸脱を規定する要因としての地位について、心理学研究、**51**(3)、152-159.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつ きあい方の発達的変化,教育心理学研究,44,55-65
- 岡安考弘・高山 巌 2000 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス,教育心理学研究,48,410-421.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要 因―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討―, 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 大西彩子 2007 中学校のいじめに対する学級規範が加 害傾向に及ぼす効果, カウンセリング研究, 4(3), 199-207.
- 大西彩子・吉田俊和 2007 中学生のいじめ加害傾向に 影響を与える要因の検討 集団規範の影響に着目 して、日本グループ・ダイナミックス学会第 54 回 大会発表論文集, 80-81.
- Rigby, K. 1998 The relationship between reported health and involvement in bully/victim problems among male and female secondary school children. *Journal of Health Psychology*, 3, 465–476.
- Salmivalli, C., Lagerspetz, K., Bjorkqvist, K., Osterman, K., & Kaukiainen, A. 1996 Bullying as a group process: Participant roles and their relations to social status within the group. *Aggressive Behaviour*, 22, 1–5.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村 俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と 学校適応,教育心理学研究,50,12-22.
- 佐藤伸一 1997 いじめ・いじめられ体験と非行, 犯罪 心理学研究, 35, 23-35.
- 佐々木 薫 1963 集団規範の研究: 概念の展開と方法 論的吟味,教育・社会心理学研究,4,21-41.
- 柴橋裕子 2001 青年期の友人関係における自己表明と 他者の表明を望む気持ち,発達心理学研究, **12**(2), 123-134.
- 杉田明宏・若松養亮・杉山弘子・菊地則行・片岡 彰・菊地武剋・寺田 晃 1989 中学生のいじめに 対する態度とその背景―対人関係からのアプロー チー,青年心理学研究,3,29-38.
- 相馬俊彦・浦光 博 2007 恋愛関係は関係外部からの ソーシャル・サポート取得を抑制するか―サポー ト取得の排他性に及ぼす関係性の違いと一般的信 頼感の影響―, 社会心理学研究, **46**(1), 13-25.
- 竹村和久・高木 修 1988 "いじめ" 現象に関わる心 理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に 対する同調傾性—,教育心理学研究,36,57-62.

立花正一 1990「いじめられ体験」を契機に発祥した 精神障害について、精神神経学雑誌、92,321-342. 山岸俊夫 1998 信頼の構造、東京大学出版会. 卜部敬康・佐々木 薫 1999 授業中の私語に関する集 団規範の調査研究―リターン・ポテンシャル・モ

デルの適用一,教育心理学研究,47,283-292. (受稿: 2007.12.18, 受理: 2008.5.6)